The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	平和資料館における性暴力の表象について
Author(s)	松永, 健聖
Citation	平成30年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書. 2019
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71919
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式６

申請先学部　　文学部　採択番号　No.文８

平成３０年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書

ふりがな 氏　　名	まつなが　たけまさ 松永　健聖	学部 学科	文学部人文学科	学年	３年
ふりがな 共　同 研究者氏名		学部 学科		学年	年
					年
					年
アドバイザー教員 氏名	北原　恵	所属	文学研究科		
研究課題名	平和資料館における性暴力の表象について				
研究成果の概要	研究目的、研究計画、研究方法、研究経過、研究成果等について記述すること。必要に応じて用紙を追加してもよい。（先行する研究を引用する場合は、「阪大生のためのアカデミックライティング入門」に従い、盗作剽窃にならないように引用部分を明示し文末に参考文献リストをつけること。）				

1. 研究目的

⑴着想に至った経緯

私は昨年度の自主研究奨励事業において、共同研究として占領期における大阪大学豊中キャンパス周辺地域を研究し、Itami Air Base（占領軍接収期の伊丹空港の呼称）を中心に、基地周辺に暮らす人々の生活について聞き取り調査をおこなった（「交流と断絶の占領期−大阪大学周辺地域を中心に−」）。その際、占領期当時の資料からは、占領軍による性暴力被害や「パンパン」と呼ばれた女性に関する記述が多数発見されたが、研究内において聞き取りなどで直接当事者の声を集めることは叶わず、さらに周辺住民でさえもそれらに対する語りを躊躇するような傾向が見られた。では一体、このような語りは今までどのように扱われ、またどのように表象されてきたのであろうか。本研究では、このような「語られない」性暴力が現代の性暴力問題にも連続するものであるとの考えをもとに、日本で唯一地上戦がおこなわれ、戦争体験の展示や語り継ぎなどがおこなわれている沖縄において、性暴力がどのように表象されているのかを明らかにしようとするものである。

（注 1）本研究では、「平和資料館」という用語を「戦争や平和に関する展示を行っている博物館や美術館」の意味で用いるものとし、常設展・企画展の別を問わない。

（注 2）「パンパン」という語は、当時差別的な文脈で使用されていることもあったが、本報告書では研究用語として用い、鍵括弧付きの表記とする。

⑵何をどこまで明らかにしようとするのか

本研究では、戦争証言集などの一次資料の調査をはじめとして、日本国内で唯一地上戦が行われて性暴力が頻発した沖縄の平和資料館、性暴力についての展示がある東京の平和資料館（アクティブ・ミュージアム　女たちの戦争と平和資料館）へのフィールドワークを行うことで、戦時性暴力がどのように表象されている／されずにいるのかを明らかにする。その上で、そのような表象を可能にした、あるいは表象させなかった社会的背景についても考察したい。

⑶研究の特色・意義

戦時性暴力については、これまで多くの場合、日本の加害責任という論点に問題が単純化されてきた。また、それが即「慰安婦」問題と結び付けられることで、現代における性暴力問題との連続性は不可視化されてきた。このような観点をふまえ、本研究では近年研究が活発になっている戦時性暴力について、「エイジェンシー」などの概念を応用しながら平和資料館における表象のあり方を明らかにするという点で重要である。また、平和記念館での表象のあり方を検討する試みは、戦争当事者の数が大幅に少なくなってきている現在において、平和資料館を起点とした新たな平和教育の在り方を模索する営みへとも繋がっていくであろう。

2. 研究経過

⑴文献調査

沖縄戦や戦時・占領下の性暴力などに関する基本文献・先行研究を調査した。また、ジェンダーや博物館論などについても文献を読解し、理解を深めた。なお、対象時期を戦時中にのみ限定することなく戦後や現代まで視野を広げることにより、性暴力を現代にもつながる問題として捉えることを課題とした。

⑵資料調査

市町村史などに収められている体験談や、元「従軍慰安婦」の方々への聞き取り集などを調査した。その際、何が語られ、何が語られないのかに注目し、そのような語りの形式を規定している社会的背景についても考察をおこなった。

⑶フィールドワーク

研究目的でも述べた通り、沖縄、東京へのフィールドワークをおこない、資料調査で収集した性暴力の体験が展示においてどのように反映されているのかを考察した。その際、平和資料館の性質や対象などにも注目し分析をおこなった。また、資料館関係者に対する聞き取り調査も実施した。

⑷分析・検証

1~3 で収集した情報を整理し分析した。また必要に応じて追加の調査を実施した。

⑸まとめ

研究成果報告書の作成を通してまとめをおこなった。本段階では研究全体を振り返り、現在までにどのような展示がなされているのか、また、社会的背景により性暴力の語りや展示がどのように規定されているのかを明らかにした。

3. 研究成果

はじめに

本研究は、主に沖縄県下の平和資料館における性暴力展示について扱ったものである。1991 年の元従軍「慰安婦」金学順の名乗り出以降、研究者や市民らの調査により、国内外における日本軍慰安所の実態が明らかになってきた。学問の分野においても、日本の性暴力研究は主にジェンダーの分野で発展を見せ、これまで不可視化され語られてこなかった性暴力被害の一端が新たな理論の枠組みの

もとで明らかになってきた。しかしながら、このような学問的発展は必ずしも世間一般に理解されてはおらず、現在も性暴力の被害は幾重にもスティグマ化された状況にある。

ところで、日本においては、原爆の被害を受けた長崎市と広島市が 1955 年にそれぞれ建設した「長崎国際文化会館」と「広島平和記念資料館」が、アジア太平洋戦争後の最初の平和資料館である。「戦争の悲惨さと平和の貴さを伝えるため」の平和資料館はその後続々と造られ、1990 年代に入ってからは「建設ラッシュ」とも呼ばれる状況が生まれた。その要因や目的としては、戦争に関する資料の収集や戦争体験世代の減少に伴う戦争体験の継承の必要性、自治体にとっての事業の新規性などが挙げられるという［岩垂 1994］。それと同時に、1990 年代半ば以降、全国の戦争博物館・平和資料館の展示は、（広義の）「政治的」注目を浴びた［荒川 2006］。その背景にある問題としては、特にアジア太平洋地域における歴史認識問題や、歴史教科書問題、領土問題や公人の靖国参拝などが考えられる。本論文でも後に「沖縄県平和祈念資料館展示改ざん事件」として取り上げるように、平和資料館の展示内容に自治体の権力者が介入し「改ざん」が行われるという事態も、平和資料館における展示が「政治的」なものであることを示す一例となっただろう。

こうした事例に鑑みれば、平和資料館は単なる戦争体験の展示の場ではない。設立に携わった自治体や活動家、建設地の市民などが意図する「平和」が展示され、それが「歴史」としてそこに訪れる人たちに示されるという点で、極めて「政治的」な意味を持った空間であるといえよう。

そしてアジア・太平洋戦争において地上戦を経験し、およそ一年間という期間に 146 か所の慰安所が設置された沖縄では、朝鮮半島や台湾の女性、辻遊廓の女性たち、九州の女性たちが「慰安婦」として配備された。その後のアメリカ占領下においては、米軍による性暴力被害が頻発した。本論文ではこのような史実をふまえ、沖縄の平和資料館において性暴力の被害がいかに展示されてきたのかについて、各博物館や資料館へのアンケート調査や聞き取り調査、フィールドワーク等から検証したい。以下、まず第１章では、戦時・占領下の沖縄における性暴力について、これまでの沖縄戦研究や沖縄の女性史研究の蓄積に拠りながら史実を確認する。次に第２章では、沖縄県下の博物館や平和資料館においてそうした性暴力の問題がどのように展示されてきたのか、各博物館・資料館に対するアンケート調査や聞き取り調査などから実態を明らかにする。そして第３章では、2 章までの内容を整理し、展示が「いつ」「どこで」「誰によって」おこなわれているのかを明らかにし、また、展示において「何が語られるか、何が語られないか」を考察する。

以上の作業により、沖縄の平和資料館における性暴力展示の空白を指摘し、報告書のまとめとしたい。

第１章　戦時・占領下の沖縄における性暴力

第１章では、戦時・占領下の沖縄における性暴力として、戦時中の日本軍慰安所建設と、占領下のアメリカ兵による性暴力について説明したい。これら２つは沖縄県内の平和資料館において主な性暴力の展示のテーマとなっていた。なお本章では、高里［2013］、『軍隊は女性を守らない：沖縄の日本軍慰安所と米軍の性暴力』における記述を主に参照する。

1. 沖縄戦下の日本軍慰安所

本節では、沖縄戦下における日本軍慰安所建設の経緯と目的を見ていきたい。まず沖縄で最初に作られた慰安所は、1941 年ごろ、南大東島と西表島に設置されたものであった。そして 1944 年、米軍の沖縄上陸に備え日本本土や中国から転戦した戦闘部隊が配備されると、沖縄の女性への強姦事件が頻発し、沖縄最大の公娼地帯だった辻遊廓に将兵が押し寄せるようになった。そのため、軍上層部は

県当局に協力を求め慰安所設置に乗り出した。こうして、沖縄全域にのべ 146 か所以上の慰安所が設置された［『軍隊は女性を守らない：沖縄の日本軍慰安所と米軍の性暴力』：pp.14-15］。

日本軍が慰安所を設置した目的は 4 つ挙げられる。第一に、強かん防止である。駐屯地域の女性への強姦を抑え、地域住民の反発を避けることで、部隊の安定的な駐屯を図った。第二に、兵士の戦意高揚である。沖縄の「全島要塞化」に向けての飛行場建設、壕掘などの兵士の重労働を持続させるため、軍は兵士の性までも支配した。第三に、性病防止である。性病検査、コンドーム着用が強いられ、軍は兵士の性のコントロールを握った。第四に、スパイ防止である。兵士の自由行動を制限し、軍の機密事項の漏えいを防いだ［高里 2013：p.71］。

このような慰安所に「慰安婦」として配備されたのは、主に朝鮮半島、台湾、九州、沖縄の辻遊廓の女性だった。日本軍は、女性たちを出身地によって差別し、将校には九州や沖縄出身の女性たちを配置するなど待遇に差をつけた。「慰安婦」のなかには 10 代の少女も含まれ、また一日に 20 人もの兵士の相手をさせられた者もいた。さらに、「集団自決」やアメリカ軍の爆撃によって命を落とす者もいた［『軍隊は女性を守らない：沖縄の日本軍慰安所と米軍の性暴力』：pp.16-22］。

また、沖縄の住民の中には自宅を強制的に接収され、慰安所とされた者たちが多数いた。慰安所の近隣住民は、慰安所に出入りする兵士や女性たちの姿、地面に落ちているコンドームを目撃した。戦後 60 年後に、慰安所跡からコンドームの塊が見つかることもあった［高里 2013：pp.72-73］。

宮城［2017］も、こうした軍隊と「慰安婦」の密接な関係が、日本軍が駐留した地域住民にとっては当たり前の光景であり、証言だけでなく日本軍の「陣中日誌」にも詳細に記されてきたと指摘する。1970 年代に入ると、『沖縄県史』や、『那覇市史』をはじめとする市町村史編纂事業で戦争証言が綴られるようになり、その過程で「慰安婦」に関する記述が多数みられるようになっていった。さらに 1990 年代に入ると従軍「慰安婦」に関する全国的な調査の展開に呼応して沖縄でも女性たちによる調査が開始された。1992 年には親泊康晴那覇市長（当時）が国の責任を認めたものの、2018 年現在においても国は元「慰安婦」の女性に対する十分な謝罪と補償を行ったとはいえない状況である。

2. アメリカ兵による性暴力

本節では、占領下から現代まで続くアメリカ兵による性暴力やそれに対して起こった動きをみていきたい。まず敗戦直後から、アメリカ軍の性暴力に対し女性たちが「性の防波堤」とされたということがいえるだろう。1945 年 5 月、すでに沖縄の北部地域はアメリカ占領下にあり、アメリカ兵が女性を狙って襲撃する事件が頻発した。これに対し今帰仁村の慰安所経営者の提案により、アメリカ兵向けの慰安所が設立された。

また 1950 年代には、真栄原、松島、辺野古など、相次いでアメリカ兵相手の歓楽街が形成されていった。アメリカ軍の医療政策の中心は性病対策で、A サイン制度、歓楽街設置促進制度が導入された［高里 2013：p.74］。A サイン制度とは、アメリカ軍が設けた衛生基準に基づき、アメリカ軍人・軍属を顧客として営業する店舗に認可（「Approved」）を与えるもので、従業員が「性病患者接触者」として確認された場合、調査に協力し該当者を出頭させ、検査・治療・隔離することが求められたという［『軍隊は女性を守らない：沖縄の日本軍慰安所と米軍の性暴力』：p.2］。

しかしながら、性暴力事件がなくなることはなかった。1946 年には、警察へ届け出のあったアメリカ兵の犯罪 439 件のうち、103 件を性犯罪が占めていたという。多くの事件が告発すらされなかったことを考えると、これも氷山の一角と考えるのが妥当だろう。さらに 1955 年には「由美子ちゃん事件」と呼ばれる 6 歳の少女の拉致強かん殺人事件が起こり、沖縄各地で抗議の声が上がった。また、1960 年代にはベトナム戦争から帰還したアメリカ兵による凶悪な強かん事件や殺人事件が多発した

［同前：p.48］。「基地・軍隊を許さない行動する女たちの会」が「沈黙の声」として明らかにするだけでも、1945 年以降 2012 年までのアメリカ兵からの性暴力を訴える証言は 400 件を超えており、なかには性暴力を受けた後に女性が殺害される事件も含まれる。このように、2000 年代に入ってもなお、アメリカ兵による性暴力事件は発生しており、アメリカ軍基地の集中する沖縄にとってアメリカ兵による性暴力はいまだ住民の生活を脅かす問題として持続しているのである。

以上本章では、先行研究から沖縄戦下の日本軍慰安所の配置の経緯や目的、そして占領下から現代まで持続するアメリカ兵による性暴力の問題について概観した。次章では、このような沖縄における性暴力被害が沖縄県下の博物館や資料館においていかに展示されてきたのか見ていきたい。

第 2 章　平和資料館における性暴力展示

第 2 章では、筆者が行った調査（アンケート・聞き取り・フィールドワーク）を元に、性暴力展示の具体的な内容を見ていきたい。

1. 調査の概要

沖縄県内の平和資料館における性暴力展示の実態を調査するため、10 月中旬に県内 14 の施設（県立：1、市町村立：11、大学付属：1、私立：1）に対して FAX でアンケート調査をおこなった。アンケート項目としては、①常設の性暴力展示の有無、②過去の特別展などでの性暴力展示の有無、③資料収集の過程での性暴力に関する証言や記述の有無とその内容、④自由記入欄であり、全問記述式とした。これに対して、8 施設（市町村立：7、私立 1）からの回答を得た。この内、性暴力に関する展示をおこなっている（おこなっていた）平和資料館は、南風原町立南風原文化センターと佐喜眞美術館の 2 カ所であった。これら 2 カ所の施設については、11 月に聞き取り調査をおこなった。

またこれら以外にも、沖縄県立平和祈念資料館（2018 年 9 月 17 日訪問）、那覇市歴史博物館（2018 年 9 月 18 日訪問）、沖縄県立美術館（2018 年 11 月 3 日）へのフィールドワークと、ひめゆり平和祈念資料館（2018 年 9 月 18 日訪問）、沖縄市戦後文化資料展示室ヒストリート（2018 年 11 月 1 日訪問）、沖縄愛楽園交流会館（2018 年 11 月 2 日訪問）での聞き取り調査をおこなった。

さらに、詳細は次節で述べるが、沖縄タイムス社編集局特別報道チーム長・謝花直美氏（本学・文学研究科博士号取得）への聞き取りから、研究者や活動家らによって企画された展示があることが分かった。これらに関しても、11 月に関係者らに聞き取り調査をおこなった。

2. 性暴力を展示する平和資料館

(1)「沖縄戦と日本軍「慰安婦」展」の流れ

2012 年 6 月 15 日から 27 日の間、那覇市立歴史博物館で「沖縄戦と日本軍「慰安婦」展」と題したパネル展が開催された。このパネル展の主催は高里鈴代が委員長を務める「沖縄戦と日本軍「慰安婦」展」実行委員会で、アクティブ・ミュージアム「女たちの戦争と平和資料館」（WAM）との共催によりおこなわれたものである[1]。

[1] なお、WAM では「第 10 回特別展　軍隊は女性を守らない：沖縄の日本軍慰安所と米軍の性暴力」と題して、ほぼ同内容のパネル展示を 2012 年 6 月 23 日から 2013 年 6 月 30 日の間おこなった。

これほど大規模に「慰安婦」に関する展示がおこなわれることは極めて稀であるが、このような展示をおこなうことが可能であった背景として、まず沖縄における慰安所研究の蓄積が挙げられる。沖縄では、1975 年の元従軍「慰安婦」ペ・ポンギの名乗り出以降、女性史研究者を中心として慰安所に関する実態解明がおこなわれ、自治体によっては大規模な慰安所調査がすでにおこなわれていた[2]。これらの研究の蓄積を元に、「慰安婦」展では日本軍による性暴力被害や、戦後のアメリカ兵による性暴力に関する当事者や目撃者の証言が、慰安所の実態を示す一次資料や地図とともに展示されたのである。

また、慰安所が沖縄県各地に設置されたことや、現在においてもアメリカ兵による強姦事件が後を絶たないことから、これらの性暴力が沖縄の人々にとっては決して遠くない「身近な」ものであったことも、展示を可能にした大きな要因であろう。沖縄を代表する 2 大紙である「沖縄タイムス」と「琉球新報」が開催前から展示準備の状況を大きく紹介し、テレビでも琉球朝日放送がニュース番組で特集として取り上げるなど、沖縄県内では「慰安婦」展に関して大きく報道がなされたが［WAM 2014］、実行委員会のメンバーによると開催期間中に右翼団体などからの妨害は起きなかったという。このことは、「本土」において同様の展示が困難であることと対照的であろう。

なお、この「慰安婦」展には、2 週間で 1850 人もの人が訪れたという。那覇市歴史博物館での展示の後、展示を見た人々からの要望もあり、南風原町立南風原文化センター、沖縄県立八重山平和祈念館、宜野湾市役所ロビーなどでも巡回展が実施され、筆者が調査に訪れた 2018 年 11 月には、沖縄愛楽園交流会館[3]において「沈黙の声を聴く：沖縄の日本軍慰安所と米軍の性暴力パネル展」[4]と題した同様の展示が開催されていた。ここに、現在もなお「慰安婦」展が関心を集めていることが見て取れる。

(2)南風原町立南風原文化センター

南風原文化センターでは、上述の通り 2012 年に「沖縄戦と日本軍「慰安婦」展」の移動展が開催されたが、それ以外にも慰安所の場所を地図におとしたものを常設で展示している。これは南風原町における緻密な戦災調査の結果得られたものである。南風原町では 1984 年から 96 年の間に 12 の字（あざ）全てにおける調査報告書を出版しているが、これらの調査の過程で、慰安所についても数は

---

[2] その成果の一例として、「慰安所マップ」が挙げられる。

[3] 沖縄県北部にある国立のハンセン病療養所。

「「沈黙の声を聴く：日本軍慰安所と米軍の性暴力パネル展」開催にあたって」のパネルにおいて、愛楽園自治会長の金城雅春は、「この展示は、戦時や軍隊に起因する性暴力についてであるが、閉鎖的な空間のなかで、弱いものへと繰り返される性暴力はこの島でも世界でも繰り返され続けている。／性暴力は、まさしく命そのものに加えられた暴力であり、その傷は魂をも蝕みつづけるものだ。かつて、ハンセン病療養所でも、性に対する暴力が行われた。」と述べ、「弱いものへと向けられる性暴力がなぜ繰り返され続けているのか。」と問うている。愛楽園では、かつて入所者への断種や強制堕胎がおこなわれていたことが明らかになっているが、「弱いものへと向けられる性暴力」という観点から問題を提起している金城の眼差しは、性暴力研究において非常に重要な意味を持つであろう。

[4] 2018 年 10 月 13 日から 12 月 15 日の日程で開催。那覇市歴史博物館での「慰安婦」展開催中に来訪者から得られた新たな証言のパネルが、今回の愛楽園の展示では追加されている。（2018 年 11 月 2 日、愛楽園交流会館辻氏への聞き取りによる）

多くないが証言が得られたという[5]。

南風原町の調査の特徴としては、まず、慰安所に関する問題が女性に対する問題というよりも沖縄戦の一側面として捉えられていることが挙げられる。これは沖縄の他地域にも見られる特徴であるが、【図 1】の展示のように、慰安婦に関するパネルが沖縄戦に関する展示の一部として置かれている点で特筆すべきであろう。なお、南風原町では専門の調査員のみならず高校生や主婦など地域の人々が調査に加わるという取り組みがおこなわれたという。このように、地域の歴史を住民たちが能動的に掘り起こすという作業を通して、地域における慰安所の存在もまた明らかになったのである。

【図 1】南風原文化センターの慰安所に関する説明パネル　筆者撮影

(3)沖縄市戦後文化資料展示室ヒストリート

沖縄市はかつてコザと呼ばれた場所であり、米軍嘉手納基地のゲートに面する沖縄最大の歓楽街であった。ヒストリートは、戦後から復帰までの沖縄市の写真やモノ資料を展示することを目的とした資料館である。資料館はビジュアル資料の展示をメインに掲げているため、展示室内に性暴力に関する説明文などはない。

そのような展示室において、性暴力に関するものとしては、まず第 1 章第 2 節で言及したアメリカ兵向けの A サインバーの復元模型が挙げられる。カウンター席が再現され、棚には酒類の瓶が並び、壁には米軍によって発給された「A サイン」と、復帰後に沖縄 A サイン連合会が独自に発給した「A サイン」が貼られている。繰り返すが、A サイン制度とは、アメリカ軍が設けた衛生基準に基づき、アメリカ軍人・軍属を顧客として営業する店舗に認可を与えるものであり、言い換えれば店で働く女性を性病の感染源とみなして管理する制度である。女性の身体を守るためでなく、アメリカ兵の心身の健康のために運用されていたものであることをふまえると、組織的な性暴力であったといえよう。しかし、ヒストリートにおける A サインバーの展示のなかではそのような説明はなされておらず、性暴力の展示という意味合いは強調されていない。

ほかにも、コザの歓楽街の様子を写した写真も性暴力に関する展示といえるだろう。前述したように、基地の建設が本格的に始まった 1950 年代には、沖縄市にも照屋黒人街、八重島特飲街、センター通り、ゲート通り等、アメリカ兵向けの歓楽街が次々と形成された。「怪しく煌めくネオンサインの下で、ジュークボックスが鳴り響き、白人と黒人の抗争、買売春、麻薬等が蔓延り、夜のコザの街を彩っていた」という［『沖縄市戦後文化資料展示室ヒストリート』: p.18］。ヒストリートには、そのようなコザの街に立ち並ぶ店々やそこで働いていたとみられる女性の写真を含め、当時の歓楽街の様子

[5] 2018 年 11 月 3 日の、南風原文化センター学芸員平良次子氏への聞き取りによる。

を伝える写真が数点展示されている。

それに関連して、八重島の「ジュリ馬」の写真も紹介したい。ジュリとは沖縄の遊女を指す言葉であり、「ジュリ馬」は辻の遊廓の女性たちが馬首の飾りを身にまとい「ユイ、ユイ」と囃しながら那覇の街を練り歩く祭りのことを指す。当該写真は、この「ジュリ馬」の行事が、アメリカ兵相手の職を求めて辻から八重島にやってきた女性たちによって、八重島の地で開催された際に撮影されたものだという[6]。

このようにヒストリートにおいては、1950 年代のアメリカ軍基地の本格設置に伴う A サイン制度の整備や歓楽街の形成に関する展示はなされているが、それらは性暴力の文脈からは直接説明されていないと言うことができるだろう。

(4)佐喜眞美術館・沖縄県立美術館

絵画など芸術による性暴力の表象としては、まず佐喜眞美術館で 2011 年 8 月 10 日から 9 月 26 日の間おこなわれた「人間の風景　浜口知明の世界展」を挙げることができる。熊本出身の芸術家浜口知明は、1940 年に 22 歳で中国戦線に派遣された。1952 年の作品「初年兵哀歌（風景）」には、性器に長い棒のようなものを突き刺された女性が、股を大きく開き、荒原の真ん中で仰向けの状態で殺されている様子が描かれており、強姦されたあとに殺されたのか、絵画には女性から遠ざかって行く日本兵の列が描きこまれている。

また、沖縄県立美術館で 2018 年 7 月 13 日から 2019 年 1 月 6 日まで開催されている「儀間比呂志の世界」展においても、性暴力をテーマにした絵画が展示されている。画家儀間比呂志は絵本作家としても有名であるが、1991 年の作品「アリランのうた」には強制的に連行される朝鮮人の女性が、1982 年の作品「娘狩り」にはアメリカ兵に強姦されそうになり、目を見開いて激しく抵抗する女性と、村を襲い女性を拉致するアメリカ兵に対して農民たちが鍬や鎌を振り上げて抵抗するも、アメリカ兵に銃剣を突きつけられる様子が描かれている。

これらの絵画展はどちらも性暴力をメインテーマにしたものではなく、性暴力を扱った作品は数多く展示されている作品の一部に過ぎない。また、絵画の展示とパネルによる性暴力展示を同列で議論することはいささか乱暴かもしれない。しかし、これらの展示は画廊で個人が開くものではなく、美術館というパブリックな場所において一定のテーマや狙いを持って展示されたものであることは注意が必要であろう。つまり、これらの絵画展には画家の思いだけでなく展示をする人々の思いも込められているのである。これらの詳細な評価は今後の課題として、次節では性暴力を展示しない平和資料館に注目したい。

1. 展示しない平和資料館

これまで論じてきたように、戦時・占領下における性暴力を展示する平和資料館がある一方、様々な理由から展示をしない資料館も数多く存在する。以下で詳しく見ていきたい。

(1)沖縄県立平和祈念資料館展示改ざん事件

ここでは、「はじめに」でも取り上げた沖縄県立平和祈念資料館展示改ざん事件について、［玉城 2014］をもとに紹介する。

1999 年夏、沖縄県立平和祈念資料館の新資料館建設に向けて準備されていた展示のうち約 230 カ

[6] 2018 年 11 月 1 日の、沖縄市役所総務課市史編集担当伊佐真一朗氏への聞き取りによる。

所を、政治上の理由から県の行政担当者が監修委員に無断で変更・削除していたことが明らかになった。玉城によると、「沖縄戦時のガマ（自然壕）を再現した実寸大レプリカの展示において、日本軍の歩哨兵が住民へ向け持っていた銃が監修委員の許可なく撤去されていたことに象徴的だが、展示の変更は沖縄戦の悲惨さや日本軍の残虐さを隠蔽するもの（と）して、監修委員や研究者のみならず、県内の平和団体・労働組合・政党など各団体が抗議やシンポジウムを開催するなど大きな反発を生んだ」［同前：53］という。

当時、ガマの歩哨兵など、日本軍による沖縄の住民への暴力の展示が変更・削除されたことに対して批判が高まったが、その一方で性暴力に関する展示の変更・削除はあまり注目を浴びず、そのまま削除されたものもあるという。玉城は、変更・削除された①「慰安婦」問題と②A サインバーの展示に着目し、改ざんされた箇所を分析している。

①の「慰安婦」問題に関しては、「21 世紀の平和創造と沖縄」というコーナーで「アジア・太平洋諸国と日本に残された諸問題　新聞が報じる諸問題」として扱われる予定であったが［同前：61］、事件の際に削除されて現在もこの展示はなされていない。筆者が 2018 年 9 月に同館を訪問した際もこの展示はなく、「慰安婦」関連では「慰安所マップ」と軍の資料が展示の隅に小さく掲げられているだけであった。この「慰安所マップ」に関しても、説明文には研究で明らかになっている沖縄県民の「慰安婦」（主に、「辻」と呼ばれた遊郭で働いた女性が担わされた）についての記述はなく、玉城はこれを、「説明のレベルを落とす」という改ざんであると看破した。

②の A サインバーに関しては、当初バーの実寸大レプリカの他に「店で働く女性」、「米兵（ベトナム帰休兵）」、「街をパトロールする MP」のレプリカが設置される予定であったが、改ざんにより人のレプリカが消された。これも現在まで改善はされておらず、玉城は「顔を消す」ことでそこに生きた女性たちや兵士の苦楽を想像するのが困難になっていると指摘する［以上、同前：61-67］。

このように、沖縄県立平和資料館での展示改ざん事件は、性暴力に関する展示の変更・削除が広く議論されることなく今日に至っており、現在の展示においても様々な問題が解消されないままとなっている。

⑵展示できない平和資料館

⑴では、政治上の理由から性暴力に関する展示が変更・削除された例を見たが、それ以外の理由で性暴力の展示をしない平和資料館もある。ある市町村立の資料館は、市町村史において地域内に慰安所があったことは明らかになっているが、「展示に反映する際に、当該書籍記載の内容だけでは、不明確な部分（建物の大きさ、女性の人数・出身地、移動時期等）が多く証言も少ないため、メインテーマに扱う情報量が足りていない」と感じているという[7]。沖縄タイムス社の謝花直美によると、沖縄返還後の 1970 年代に、『沖縄県史』や各市町村史が活発に編纂されたが、沖縄の地域に住む人々を主体として記録がなされたので、過去に「いた」「慰安婦」の女性たちの存在は、断片的にしか記録されなかったという[8]。1991 年の金学順の名乗り出以降に詳細な聞き取り調査が進められて、各自治体での慰安所の様子などが明らかになってきた。そのような流れの中で「沖縄戦と日本軍「慰安婦」展」のような性暴力に焦点を当てた大規模なパネル展も実施されるようになったが、その一方で、各自治体単位ではまとまった資料や証言は未だ少なく、性暴力をメインとしては「展示できない」、もしくは「沖縄戦の一側面としての位置付けになってしまう」という現状があるのである。

[7] 2018 年 10 月 26 日の、アンケート調査の回答による。

[8] 2018 年 9 月 18 日の、謝花直美氏への聞き取りによる。

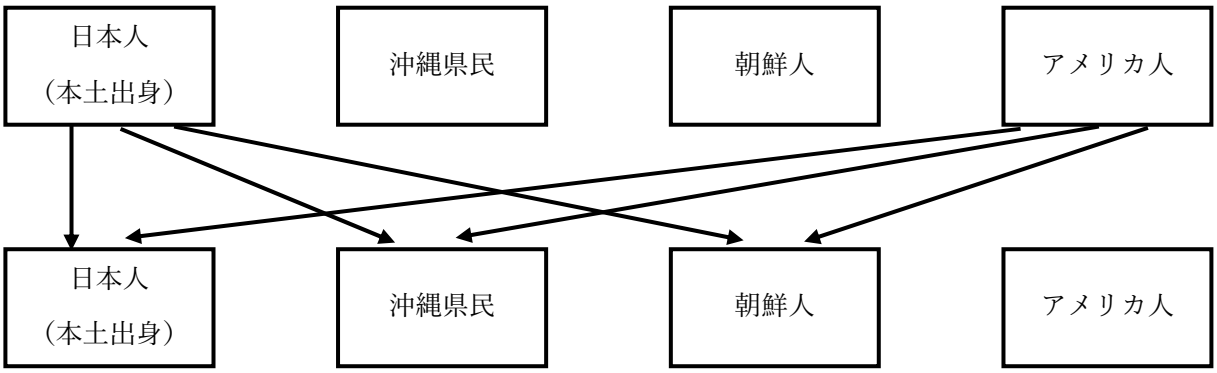
第３章　何が語られるか、何が語られないか

前章までで、沖縄県内の平和資料館における性暴力の展示について見てきた。1990 年代以降に各自治体や地域住民らの手で掘り起こされた「慰安所」に関する証言は、2000 年代以降に「慰安所マップ」やパネル展示の形でまとめられ、一部の資料館において展示がなされるようになった。その一つが、2012 年に那覇市歴史博物館で開催された「沖縄戦と日本軍「慰安婦」展」である。また本報告書では詳しく取り上げなかったが、これ以外にも、2015 年 11 月に沖縄県平和祈念資料館で開催された「ヤン・バニング写真展：Comfort Women　インドネシアの日本軍「慰安婦」」や、2016 年 10 月にタイムスホールで開催された「正子・ロビンズ・サマーズ絵画展」などが研究者や市民の手によっておこなわれている。これらの展示にはある共通する特徴がある。それは、公的な施設を使用した展示の場合でも、資料館の職員が中心となって展示をするのではなく、資料館は展示の場所を貸すだけということである。実際の展示は、「普段から慰安婦」問題に取り組み・活動している人たちが折に触れて実行委員会を組織し、おこなっているのだ[9]。今回、愛楽園交流館で開催されていた「沈黙の声を聴く：日本軍慰安所と米軍の性暴力パネル展」においても同様のことが言える。愛楽園自体は国の施設であるが、自治会と共催という形をとることで、パネル展の開催が可能となったのである。

また、これも 1990 年代以降であるが、各自治体による沖縄戦の聞き取り調査の中で、地域における「慰安所」の実態やアメリカ兵による性暴力被害の様相が断片的にではあるが明らかになった。これらは、南風原町立南風原文化センターや沖縄市戦後文化資料展示室ヒストリートのように、一部の自治体が運営する資料館の中で、沖縄戦やアメリカ占領下というコンテクストの元に展示がおこなわれている。

さらに、美術館において性暴力が主題の絵画が展示されることも注目に値する。展示の時期自体は他のパネル展などと軌を一にしているが、作品自体の年代はまちまちでかなり古いものもあることを鑑みると、絵画に注目することでこれまで述べてきたような 1990 年代をターニングポイントとした語りとは別の認識が生まれるかもしれない。ただ、ここではテーマ設定上「展示されている」時期にこだわり、絵画そのものへの考察は今後の課題としたい。

ここまで、展示の具体的な内容を整理してきたが、ここで改めて、沖縄戦や占領下に関する証言の中でどのような性暴力が語られ、どのような性暴力が語られないでいるのかを考えてみたい。



【表 1】語られてきた性暴力　筆者作成

（上段が男性、下段が女性。矢印の先が性暴力の被害者）

[9] 2018 年 9 月 18 日の、謝花直美氏への聞き取りによる。

【表 1】は、沖縄において公的な証言として語られた性暴力の種類をまとめたものである。これを見ると、大きく 3 つの語りが「存在しない」ことが分かる。1 つ目は沖縄県民や朝鮮人男性による性暴力。2 つ目は女性が加害者になる性暴力。3 つ目は同性同士の性暴力である。ここでは 1 つ目について注目したい。

ここまで見てきた平和資料館における性暴力展示は、⑴戦時下の日本軍による慰安所設置と強姦、⑵占領下におけるアメリカ兵の性暴力に大別できた。⑴は日本人男性から、⑵はアメリカ人男性から矢印が伸びているが、当時「日本人」とされた人々を細分化して考えてみると、日本軍による性暴力が語られる際に基本的に想定されているのは「本土」出身の日本人であることが分かる[10]。もちろん、現地召集された初年兵は慰安所を利用できなかったという話もあるが、30 代 40 代の防衛隊員や在郷軍人については不明であり、沖縄戦を通して日本軍の少なくとも 2~3 割は沖縄出身者であったと推定される[11]ことからも、決して本土出身の日本兵のみが慰安所を利用していたとは言い難いのではないだろうか。このように考えると、他地域に例を見ないほど進んでいるように思われた沖縄での性暴力の聞き取り調査も、まだ空白の領域があることが分かる。

同様のことが、平和資料館における性暴力展示についても言えよう。これまで沖縄で実施されてきた性暴力展示では、⑴戦時下の日本軍による慰安所設置と強姦と⑵占領下におけるアメリカ兵の性暴力が展示の中心であった。しかし、ここで「日本軍」という時、沖縄出身者の存在はあまり考慮されず、もっぱら「本土」出身者が想定されてきたのではないだろうか。なぜこのような空白があるのか、こうした空白の意味を考えることが今後の課題であろう。

＜参考文献＞

秋林こずえ 2013「「沖縄戦と日本軍「慰安婦」展」解題」『女性・戦争・人権』第 12 号（行路社）
アクティブ・ミュージアム「女たちの戦争と平和資料館」（WAM）編 2014『軍隊は女性を守らない：沖縄の日本軍慰安所と米軍の性暴力』WAM
――― 2018『日本人「慰安婦」の沈黙：国家に管理された性』WAM
岩垂弘 1994「日本の平和博物館の動向とその役割」『月刊社会教育』第 38 巻第 3 号（国土社）
荒川章二 2006「新沖縄県平和祈念資料館設立をめぐって（共同研究 近代日本の兵士に関する諸問題の研究)」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 120 号（国立歴史民俗博物館）
上野千鶴子、蘭信三、平井和子編 2018『戦争と性暴力の比較史へ向けて』岩波書店
上原栄子 2010『新篇　辻の華』時事通信社
沖縄市役所総務課市史編集担当編 2011『沖縄市戦後文化資料展示室ヒストリート』沖縄市役所
NHK スペシャル取材班 2016『NHK スペシャル　沖縄戦全記録』新日本出版社
川田文子 1987『赤瓦の家：朝鮮から来た従軍慰安婦』筑摩書房
木下直子 2017『「慰安婦」問題の言説空間：日本人「慰安婦」の不可視化と現前』勉誠出版
儀間比呂志 1994『版画集　儀間比呂志の沖縄』海風社
佐喜眞美術館 2011『人間の風景　浜田知明の世界展』佐喜眞美術館
佐喜眞道夫 2014『アートで平和をつくる：沖縄・佐喜眞美術館の軌跡』岩波ブックレット
ジュディス・バトラー 2018『ジェンダー・トラブル：フェミニズムとアイデンティティの攪乱　新装版』青土社

[10] 沖縄出身の日本兵が慰安所を利用したという証言は、管見の限りない。

[11] 2018 年 12 月 3 日の、大阪大学文学部北村毅先生への聞き取りによる。

高里鈴代 2013「日本軍「慰安婦」と今」『女性・戦争・人権』第 12 号（行路社）
玉城福子 2014「沖縄県平和祈念資料館展示改ざん事件の再考」『女性・戦争・人権』第 13 号（行路社）
南風原町史編集委員会編 1999『南風原が語る沖縄戦』沖縄県南風原町
南風原町立南風原文化センター 2011『南風原文化センターハンドブック』南風原町立南風原文化センター

洪玧伸 2016『沖縄戦場の記憶と「慰安所」』インパクト出版会

正子・R・サマーズ 2017『沖縄からアメリカ　自由を求めて！：画家　正子・R・サマーズの生涯』高文研
正子・ロビンズ・サマーズ絵画展実行委員会 2017『正子・ロビンズ・サマーズ絵画展：記念集』
宮城晴美 2017「沖縄における「軍隊と性」」『女性・戦争・人権』第 15 号（行路社）
村田麻里子 2014『思想としてのミュージアム：ものと空間のメディア論』人文書院
歴史学研究会、日本史研究会編 2014『「慰安婦」問題を／から考える：戦時性暴力と日常世界』岩波書店

＜謝辞＞
本研究では、アンケート調査や聞き取り調査などで多くの方々にご協力いただきました。ここではご協力いただいたすべての方の名前をあげることはできませんが、調査において特にお世話になった、沖縄タイムス社の謝花直美さん、ひめゆり平和祈念資料館学芸員の古賀徳子さんには改めてお礼申し上げます。
また、アドバイザー教員の北原恵先生、北村毅先生、西村まりなさん（日本学 4 回生）には大変お世話になりました。ありがとうございました。